

## 9世紀日本の複合的危機と今日への教訓

- 清和天皇 858-876
- 陽成天皇 876-884
- 光孝天皇 884-887
- 宇多天皇 887-897

### ●清和天皇

清和天皇と言えば清和源氏

皇族から臣籍に降下すると、一字姓を名乗るしきたりあり。

源姓は、古代中国で皇帝の一族が臣籍降下するときに与えられた姓のひとつ

桓武天皇の子、嵯峨天皇が中国の習慣をなぞって、日本にも源氏が始まった。

どの天皇の血筋を引くかで源氏もいろいろ。

鎌倉幕府を開いた源頼朝や弟の義経はというと、清和源氏。嵯峨天皇の曾孫の清和天皇の

そのまた孫、経基王が臣籍降下して源経基となる。そこから始まる源氏だから清和源氏。

頼朝や義経は経基から数えて九代目。

清和天皇は9歳の年に即位。父の文徳天皇が崩御したから。天安2（858）年11月。

翌年に天安は貞観と改元。

貞観 中国の唐王朝の太宗の時代に用いられた元号。7世紀の前半。

太宗の治世は「貞観の治」と呼ばれる。強力な皇帝権力のもとで政治が安定し、国家が繁栄。

理想の時代として伝説化。それで貞観。

ところが日本の貞観は期待を大きく裏切る。

貞観3年、旱魃による食糧危機。

5年、咳逆病が大流行。全国で死者多数。新型インフルエンザ。

同年、越中・越後で大震。圧死者続出。

6年、富士山が「貞観の大噴火」。

同年に阿蘇山も噴火。

8年 応天門の変 伴善男が藤原良房に敗れる

9年、阿蘇がまた噴火。

10年、播磨・山城で大震。マグニチュード7のクラスで、山崎断層が動いたとも言われる。都では余震が続いた。

同年末 摂津地震。

11年5月26日。「貞観地震」。今日の岩手県から茨城県までの太平洋岸を激甚災害が襲う。東日本大震災に匹敵したであろう大地震。陸奥の国府、多賀城も水面下に没するほどの大津波も起きる。

同年6月 「貞観の入寇」。新羅の海賊が九州を荒らす。朝鮮からの侵略行為。

7月には巨大台風が肥後熊本に大災害。阿蘇の度重なる噴火で降り積もった灰も影響したと考えられる。

13年 鳥海山が大噴火。

14年 渤海使が新たなウイルスを大陸から運んだとみられる。またも咳逆病が大流行。太政大臣、藤原良房も、このとき没する。

18年 清和天皇はまだ20代半ばだというのに、自らが即位したのと同じ歳の9歳の息子に皇位を譲る。→陽成天皇。 理由は定かではない。

天譴論で考えるのが適切か。徳が無いということ。

皇帝は天の正義を地上に実現すべく天に許されて権力をふるえる。もしも皇帝に徳が足りず、正義を地に行えなければ、天は皇帝を厳しく譴責。地震や台風や疫病や外国勢力が襲う。天皇は自らの徳の乏しさを民衆に詫げる詔を幾度も出し、ついに退位。

元慶3年5月8日、30歳で出家。

そのあと、丹波、山城、大和、河内、摂津を巡り、苦行。

山林修行。頭陀行。山中の寺院もめぐる。

※昭和天皇の戦後の全国巡幸

上皇陛下の被災地や太平洋戦争の戦地への旅。

清和天皇に侍奉した僧

真雅 空海の弟 貞観寺を預かる

宗叡 貞観4~8 在唐 入唐(にっとう) 八家のひとり 最澄、天海、円仁など

高丘親王とともに入唐

五台山の大華嚴寺で清和天皇の発願によって千僧供養を行った

との説あり

「理趣経マンダラ」

不二の思想の貫徹

金胎不二 浄穢不二 この世の全肯定

巡行にも宗叡がつきそう

山城と丹波の国境の愛宕山麓の水尾（みお）の地で祈りの暮らしをしようと、新しい寺を造営中に 31 歳で崩御。苦行で寿命を縮めた面もあろう。元々病弱。

愛宕山の山頂にある愛宕神社は雷神や火神を祀り、防災と縁がある。

## ●陽成（ようぜい）天皇

つくばねの 峰より落つる みなの川

こひぞつもりて 淵となりぬる

貞観から元慶へと改元。

清和上皇が祈りの暮らしに入っても、天変地異は容赦なし。

元慶 2（878）年 9 月 29 日 M7・4 と推定される相模・武蔵地震。大正期の関東大震災と似たもの。

4 年 10 月 14 日 M7 と推定される出雲地震。清和上皇の崩御は、実は出雲地震から間もなく。

出雲地震から来る心労が死に結びついたとはもひとつの推測。

## 元慶 2-3 元慶の乱 出羽

そのあとしばし大地震は絶える。しかし

8 年 2 月、摂政の藤原基経に追われるように天皇退位。理由は分からない。

有力な説 嵯峨源氏の系統で陽成天皇の乳兄弟にもなる源益（まさる or すすむ）が宮中で撲殺される事件が起きた 3 カ月後なのは間違いなく、陽成天皇が手を下したのではないかという説が有力。

天皇自らの可能性

あるいは誰かに手を下させた可能性

事件は天皇の眼前で起きている

天皇の周囲に大きな乱れがあつて責任をとらされた。そう考えることもできる。

## ●光孝天皇

陽成の後を継いだのは？ 文徳の弟で清和の叔父の光孝。

君がため春の野に出でて若菜摘む我が衣手に雪は降りつつ

藤原氏の意向

陽成系に継がせたくないし、陽成の皇子はまだ小さい。

光孝は即位したとき 50 代半ば。

貞観の東北の大地震を凌ぐ規模の仁和 3（887）年 7 月 30 日 仁和地震。

南海トラフの広域を震源とする東海・東南海・南海地震であったと推定。

西日本のみならずたとえば信濃でも同日に大災害が発生した記録がある。

※現代の日本がいちばん恐れている地震だとはいうまでもありません。

大きな余震がひとつきほど続く。

その最中に光孝天皇は崩御。

原因は伝えられていない。

地震発生前は普通に行事をこなす。

元気だったと思われる。

天譴論に苛まれてか、もしかして地震で傷を負ったせいかな。とにかくあまりに急。

跡継ぎの用意なし。光孝は自分の次は陽成系のつもり。野心のないことを示したい。

光孝の子をみな臣籍降下。

でも乱暴者？で恐らく藤原氏に敵対的な陽成系には藤原氏が戻したくない。

そこで

### ●宇多天皇

光孝の皇子から源定省となっていた人が皇族に復帰して天皇に。

今日風に言うと、旧宮家から皇族に復帰して即位した具合。

清和→陽成→光孝

天譴論の根強い時代にこれだけの凶事が続く。

天皇の権威にどれだけ傷がついたか。

家来は罪を負わない。

悪いのは天皇というのが天譴論。

20 年と少しの間に、

あいつぐ疫病

**政変**

外国からの侵略行為

皇室の乱れ（殺人事件）

越の国の大震

富士山や阿蘇の噴火

関東大震災とダブる地震

東日本大震災に類する地震と東海・東南海・南海三連動型の大地震が 18 年の間隔で。  
三代の天皇のうち、二代は地震と関係して崩御したともみなせる。

宇多天皇は菅原道真らを重用し、皇威の回復に努める。

『日本三代実録』を編纂。

正史編纂にこそ皇威の証明があるとかがえる宇多の熱意とそれを受けた道真の努力の  
たまもの。

藤原氏を抑制しようともする。が、藤原氏の力が強まるばかり。

歴史の確認が皇威の証明にならない。あまりに内容が悲惨過ぎるから。

宇多は圧倒され、権力はいよいよ私されるようになる。

公が私に、聖が俗に呑みこまれてゆく。

ここに隠れた日本史の大転換期がある。

#### ■六国史

『日本書紀』	神代から持統天皇まで	720 (養老 4) 年完成
『続日本紀』	文武天皇から桓武天皇まで	797 (延暦 16) 年完成
『日本後紀』	桓武天皇から淳和天皇まで	840 (承和 7) 年完成
『続日本後紀』	仁明天皇一代	869 (貞観 11) 年完成
『日本文徳天皇実録』	文徳天皇一代	879 (元慶 3) 年完成
『日本三代実録』	清和・陽成・光孝三代	901 (延喜元) 年完成

そのあとは「四鏡」にとぶ。公でなく私の紡ぐ歴史になる。

「正史」が途絶える